



教職大学院 10 年目の春を迎えて



大学院教育学研究科長 長 南 幸 安

今年の青森の冬は毎日報道でされるほどの記録的な大雪に見舞われましたが、桜の開花も例年より早いもので、毎年の季節の変化には驚きます。

さてこの春には、第 10 期の教職大学院生 21 名の入学とともに新しい教員も 5 名迎えることができ、教職大学院は 10 年目の節目に入りました。

この 10 年間で修了したミドルリーダーコースの現職教員の大学院生の皆さんは、教育現場に戻られてから教職大学院で修得したスキルなどを使いながら中堅教員として活躍されていると思います。またストレートマスターで入学し修了した大学院生の皆さんは、大学院で初任者として教育現場に立つ前に十分な技術と心構えを身につけ、また教職大学院で培った現職の先生との絆も心強く教職の道に携わっていると思います。

この 10 年間の修了した大学院生の皆さんや、指導をしていただいた教員の皆さんのお陰により、本学部の教職大学院の修了生の評価は非常に素晴らしいものです。そのため今年から、青森県からミドルリーダーコースの入学者には、授業料のサポートが出る施策が始まりました。これも本学部の教職大学院の修了生が、青森県教育現場にもたらすメリットと貢献が大きなものである証左の一つであると思います。またそれ以上に、これからの修了生に期待する教育現場への還元への期待も大きいことでもあります。同様に既に始まっている教職大学院生の奨学金返還免除制度も、国の修了生への未来の期待を示しています。

今年度には次期の新学習指導要領の改訂が発表され、デジタル教科書が正式な教科書として認可されるなど、教育施策の変化が次々と続きますが、大学院生の皆さんはこの変化にもうまく対応でき期待以上の成果が出せるような修了生になれるように、大学院での研鑽に努めてください。

その期待に応えるためにも、この 10 年を節目に、次の 10 年へ向けて教職大学院としても、皆さんと一緒に努力を続けていくつもりです。皆さんが実りありと実感できる大学院時代になるように願っています。

大学院教員を校内研修会等で**無料**でご活用ください！

教職大学院では、青森県内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校における校内研修会や、各教育研究会、各教育委員会主催研修会等へ、本大学院教員を無料（謝金・旅費不要）で講師として派遣する取組を行っています。本取組は、本大学院の現職教員院生が、講師の大学教員に帯同して研修会等に参加させていただくことで、研修会等の企画・運営の仕方を学ぶこと等を目的とし、本大学院の実習の一環として行わせていただくことにより無料としております。

本大学院教員が担当可能な研修テーマや内容については、本大学院ホームページ（「弘前大学大学院教育学研究科」で検索）内の「教職大学院教員を講師等としてご活用ください」をご覧ください。講師派遣の申込みは、同ホームページ掲載の「講師派遣（実習ⅡA）申込み票」に必要事項を記入のうえ、FAXまたは担当者宛てメールにてお送りください。なお、研修会終了後の報告書等の提出は不要です。申込みは随時（来年1月頃まで）受け付けておりますので、ぜひご活用ください。



2027 年度の教職大学院の入試について

2027 年度の新たな院生を迎える入試を以下の通り実施します。（推薦特別選抜制度を廃止し、日程を変更しましたのでご注意ください。）

第1期・・・一般選抜：11月3日（火）
[出願期間は10月3日（金）～10月16日（金）]
第2期・・・一般選抜：12月19日（土）
[出願期間は11月30日（月）～12月4日（金）]

☆進学説明会

第1回：7月22日（水）16：00～
第2回：10月7日（水）16：00～
第3回：11月25日（水）16：00～

なお、合格者の合計が募集人員に達した場合、それ以降の募集を実施しないことがあります。
*詳しくは、本学ホームページの入試情報をご覧ください。

🌸この春、5名の新任教員が着任しました！

長内 修吾 教授



「春風や 闘志いだきて 丘に立つ」(高浜虚子)。新しい職場に転任した際には、いつもこの句を思い出し励まされてきました。この春に実務家教員として着任しました長内修吾(おさないしゅうご)です。教職は、工業高校からスタートし、総合学科や普通科の高校において管理職も経験させていただきました。また、教育行政機関にも長く勤務しました。そこで心掛けたことは、学校現場の課題にスピード感をもって対応することと、国や県内地域の状況を俯瞰し本県の実態に即した教育環境を構築することの両立です。しかしながら、学校や子どもを取り巻く状況の変化は激しく、思うように解決

できない難しさや歯がゆさも感じてきました。院生の皆さんが理論と実践の往還のもと、本県教育課題の解決をリードしていく教員として活躍されることを願い、全力で支援・応援してきたいと思っています。また、私自身、共に学び、互いに高め合えることを楽しみにしています。どうぞよろしくお願いいたします。

山田 大介 教授



この4月に実務家教員として着任しました、山田大介(やまだだいすけ)と申します。前任の中学校では、校長として「自律・創造・貢献」の理念のもと学校経営にあたり、喜びも苦労も、教職員や生徒たちと共有してきました。学校現場、教育行政機関を含めて38年間、笑顔で生徒たちをやさしく包み込む、生徒ファーストな先生方、授業や行事、生徒会活動などに一生懸命取り組むメンコイ生徒たち、学校のために協力を惜しまない地域の方々など、たくさんの素晴らしい出会いに恵まれました。今回、これまでの経験を活か

して、教員養成や後進の育成などに携わりながら、教育の発展に貢献する機会を得られたことに心から感謝しております。院生の皆さん、子どもたちが、主体的に未来を切り拓く「生きる力」を身に付ける教育を実現できるよう、一緒に頑張ってください。よろしくお願いいたします。

淋代 秀樹 准教授



この4月、実務家教員として着任しました淋代秀樹(さびしろひでき)と申します。前任の常盤野小中学校では、岩木山の懐、「聖地 嶽」で実がぎっしり詰まった「嶽きみ」のような濃い時間を過ごし、教頭として土にまみれ、地域と共に歩む教育の価値を再確認して参りました。そして、厳しい冬の常盤野で「たくましく」生き抜く術を、子どもたちや地域の方々から教わったのは私の方でした。現在の学校現場では、子どもや保護者のニーズの多様化が加速的に進んでおり、教員の負担感が強調されがちですが、本来「先生」は子どもの

成長に直接関与できる、最高に魅力的な仕事です。だからこそ、私は「ウェルビーイング」の連鎖を大切にしたいと思います。先生方が笑顔でこそ、子どもも幸せになれるからです。院生には次代を拓く「しなやかな実践者」として、現職院生の皆様には職場全体の専門性を引き出す「ミドルリーダー」としての自覚を促し、現場の泥臭い実践と理論を往還させながら、共に「4つの力」を磨き上げたいと思います。私自身も、院生の皆さんと共に「あずましい」学校・教室づくりを語り合い、今の時代を面白がれる「たくましい先生」の輪を広げていけるよう、一歩ずつ歩んで参ります。どうぞよろしくお願いいたします。

新川 広樹 講師



今年度より教職大学院に着任しました、新川広樹(しんかわひろき)と申します。昨年度3月までは本学教育学部に所属しており、主に教育相談・臨床心理学に関する授業を担当しておりました。本大学院においては、学校現場の多様化・複雑化する事例に即しながら、教育相談に関する実践知をさらに深め、その知見を現場に還元していくことに貢献できればと考えております。以前より、この大学院を傍から眺めていて、教員にも院生にも、他とは違う熱

量があることを感じておりました。教職の在り方や働き方が問われる時代だからこそ、教育という営みの本質や、教師という仕事の価値と未来を、皆さんとともにあらためて見つめ直していきたいと思っております。私の専門分野の立場からは、認知行動療法などエビデンスに基づく予防的・発達促進的支援の視点も取り入れながら、青森の学校コミュニティだけでなく、教育界全体に新たな知見と実践をもたらす場を築いて参りたいと考えております。どうぞ宜しくお願いいたします。

砂田 大樹 助教



この4月に着任しました、砂田大樹（すなだひろき）と申します。2014年に弘前大学教育学部を卒業、2017年に弘前大学大学院教育学研究科を修了しました。地元も青森県なので、地元であり母校である弘前大学に教員として戻ってくるというのは、学生時代は考えもしませんでした。非常にうれしく思います。今は、冬は雪が積もるし、桜が咲くのは4月ということを感じています。グーグルマップを見なくても道やお店の場所がわかり、色々懐かしいです。専門は算数・数学教育学です。特に、戦時期の数学教育史に関する研究を中心に、全国学力・学習状況調査に着目した研究もしています。昔の教科書と今の教科書を見比べることで、時代による変化や、今ではどのように扱えそうか考えることができます。また、日常の問題を数学的に解決するといった、数学教育として大事にしたい理念が戦前からあります。当時の理念を知り、今でも大事にしたいことを考えることができることに、研究の面白さを感じています。教職大学院では、算数・数学教育や、教育方法に関する講義を担当します。大学院生や、青森県内の先生方とともに、自分自身も様々なことを学び、成長していきたいと思っております。

ともに学び、高め合う仲間たち～入学院生からのメッセージ～

ミドルリーダー養成コース

岡部 晋也（青森県立弘前南高等学校）



これまで現場で様々な経験を積み、学ぶことがたくさんありましたが、さらに学び続ける姿勢を大切にしたいと考えて教職大学院への進学を決意しました。改めて教育学の理論を体系的に学ぶことで、自分の視野を広げたいと思っています。大学院での生活は、他校種の先生方やストリートマスターの学びに向き合う姿勢に日々刺激を受けています。また、講義でのインプットと省察によるアウトプットを往復する中で、自らの実践や学びを振り返る機会となっています。ここで得た知見を現場の教育活動に還元できるよう、理論と実践を往還しながら学びを積み重ねていきたいと思っております。

小山田 朱美（弘前大学教育学部附属中学校）



中学校教員としての勤務年数が充実期に入ってから、やりがいを感じる反面、この先もこのままの自分で良いのだろうかと感じながら過ごしていました。これまでの経験値で切り抜けるだけで

はなく、さらに伸ばせること・身につけられることを得たいとの思いから、入学しました。自分の中にできていた「これはこうでしょ」という思い込みに縛られることなく、さまざまなものを柔軟に吸収できる二年間にすることが目標です。

職場のみなさまの理解や協力をいただき、教職大学院で学ぶ機会を得られたことに心から感謝しています。教職大学院で学んだことを、今後の勤務に少しでも還元していきたいです。

加賀千裕（野辺地町立野辺地小学校）



入学してもうすぐ2週間が経とうとしています。今回教職大学院で学ぶチャンスをいただけたことに、大変感謝しております。

これまで小学校教諭として働く中で、多くの児童と出会い、充実した日々を過ごしておりました。しかし経験が増えても、「私はこれでよいのか・児童のためにできることはないのか」という不安は強くなるばかりでした。自分に信頼を寄せてくれる児童や保護者、同僚の先生方に対してお返しできるものを増やしたいし、自分の教育の芯をもう一度見つめ直したい。そのような思いが、ここ数年漠然とあったように思います。すでに今日までの講義や同期となったミドル・ストマスの皆さんとの会話から、多くのことを学び、考える起点をいただけていま

す。この出会いと時間を大切に、現場に戻る際に還元できる「何か」を見つけられるよう励みたいと思います。『ピンチはチェンジのチャンス』。よりよい変化のために、自らの課題と真摯に向き合う2年間にします。

笹川 朋（青森県立青森第一養護学校）



緊張と不安でいっぱい入学から約2週間。日々の授業では、理論を学びながら自分の中にぼんやりとあった考えを整理したり、これまでの経験を振り返ったりと、日々の課題や考えることの多さに頭を悩ませつつも、自分なりに奮闘しています。また、他校種の先生方やストレートマスターの皆さんの話を聞き、新しい視点や共通点を知っていく中で、学びの深まりや不安が解消されるのを感じ、充実した日々を送ることができています。

貴重な機会をいただいたことへの感謝の気持ちを忘れず、自己の学びを深めるとともに、その成果を現場へ還元できるよう、日々取り組んでいきたいと考えています。

舘山 健二（青森県立青森東高等学校）



4月初日、新たなメンバーと出会い、新たなスタートを切った初日、何年も前に経験した大学入学時の高揚を思い出しました。この年になっても、また新たなことに挑戦できる機会を頂けたことに感謝しています。教職大学院では、現在勤務校で担当していた「総合的な探究の時間」に関する研究や、各教科におけるAIの具体的な活用方法などについて研究したいと考えています。この2年間で自己研磨のチャンスとして捉え、現場に戻った際には、他の先生方を少しでも支えることのできる教員を目指して頑張ります。

能澤 大輔（青森県立青森第一高等養護学校）



この度は現場を離れて大学院で学びなおす機会をいただき、関係の皆様には感謝申し上げます。ここ数年は日々の業務の忙しさに自分自身の課題をゆっくり洗い出すこともせず、課題意識をもって研修を受講することでもできず、長年の培った知識や経験で誤魔化している自分に納得できずにいました。大学院の学びはとても新鮮で楽しく、これまでのやり方で良かったんだという答え合わせができてほっとした部分と、このままではいけないという課題の部分

が毎日見えてきます。楽しい授業ができる先生を目指しながら、現場に還元できるようにたくさんのことを身に付けて修了したいと思います。

檜川 大（弘前市立石川中学校）

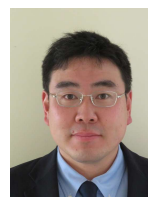


社会の変化が大きいこの令和の時代において、自身の教育観をアップデートしていかなければいけないという思いがありました。そのような中で、教職大学院で学ぶ機会をいただけたことに感謝の気持ちでいっぱいです。

教職大学院の学びは、今までの自分自身の実践を理論的な観点から見つめ直すよい機会となっています。また、授業中のディスカッションは今までになかった新たな視点を身に付けることに繋がっています。

謙虚な気持ちで1日1日を大切に、教職大学院での学びを現場に還元できるように日々精進していきます。

松坂 真吾（南部町立南部中学校）



教職大学院への入学にあたり、これまで私を支えてくださった多くの方々に心より感謝申し上げます。現場での経験を土台に、理論と実践を往還しながら学びを深め、よりよい教育のあり方を探究していきたいと考えています。大学院で得た知識や視点を自校だけでなく地域全体へ広く還元し、子どもたちの未来を支える力へとつなげていきます。学び続ける教員として成長し、地域の教育をより豊かにするため、責任と覚悟をもって研鑽を積んでまいります。

米塚 文智（五所川原市立五所川原小学校）



現場を離れ、日々新しい発見に触れる毎日は、忙しくも非常に充実しています。他校種の観察実習や教育関連施設での経験は、学校現場にいただけでは得られなかった新しい気づきばかりです。これまで当たり前だと思っていた教育のあり方を、一步引いた視点から多面的・多角的に見つめ直すことで、自分の視野が大きく広がっていくのを実感しています。この経験を大切に、一つの側面だけで判断せず、様々な角度から柔軟に考える力を身につけていきたいです。

学校教育実践・教科領域実践・特別支援教育実践コース

石澤 晴太郎（学校教育実践コース）



私は弘前大学人文社会科学部で教職課程を履修し、約2年間教職について学んできました。しかし、学部での教育実習を通して、自身の力量不足を強く実感しました。この経験から、理論と実践を往還・融合させながら実践的な指導力を高めたいと考え、本学への入学を強く志望しました。私の関心は、総合的な探究の時間を軸とした学校と地域の関係性です。高校時代からまちづくり活動に主体的に関わってきた中で、地域での学びの価値と大きな可能性を実感してきました。今後は両者を結びつけた教育実践を深く探究し、教育現場に新たな価値を生み出せる教員を目指します。一日一日時間を大切に頑張っていきます！

佐藤 日向（学校教育実践コース）



私は弘前大学教育学部から、教職大学院へ進学いたしました。進学の決め手は、4年次の実習で自身の生徒指導力に不足を感じ、現場に出る前にもう一度学び直したいと強く思ったことです。

本学では、理論的な知識を深めるとともに、充実した実習を通して「生徒指導とは何か」を問い直し、確かな実践力を身につけたいと考えています。また教科指導（数学）についても、卒業研究の成果と課題を引き継ぎ、数学を通して生徒の人生を豊かにできるような教材研究・開発に励みたいです。この2年間で将来への投資と捉え、一日一日を大切に学んでまいります。

澤田 唯人（学校教育実践コース）



高校生の頃から、教職大学院の存在を認知しており、道德教育、総合的な探究の時間の研究に興味がありました。また、学部2年の頃の授業内で、特別支援教育に興味を持ち、その中でギフテッドの研究をしたいと思うようになりましたが、特別支援教育実践コースに入学するための条件を満たしていなかったため、学校教育実践コースに進学しました。興味のある2つについて、どちらの研究をするかまだ決めていませんが、共通していることは、児童生徒の個性を深く理解することが大切であることだと思います。現場に立

った時、それぞれの個性に合った生徒指導ができるよう、この2年間で大切にしたいと思います。

金子 一輝（教科領域実践コース）



私は学部卒院生なので場所自体は見慣れた弘前大学の校舎でした。しかし、教職大学院に入学して早1週間、大学時代との雰囲気の変化、同じ院生の仲間の意識の高さ、パソコンを完全に中心とした授業展開など、毎日が新鮮な経験でした。きっとこれからも良い意味で刺激的な毎日が、私たち院生を将来一人前の教職員にしてくれるのだと思うと期待で胸が膨らみます。時には挫けそうなこともあるとは思いますが、実際に教師として働くとなった時、より生徒のためになれるような教師になれるよう、ここで学ぶ仲間と共に頑張っていきたいと思っています。

栗橋 礼昂（教科領域実践コース）



私は、社会科において生徒の資質・能力を高める方法の研究を目標に、他大学の歴史学科から弘前大学教職大学院に進学しました。弘前での生活や仲間作りに不安もありましたが、M1のみなさんが快く受け入れてくれたとともに、教職員の方々の手厚い支援などもあり、楽しく充実した日々を過ごしています。近年、問題解決力が重視される一方、その前提となる「問題発見力」は十分に育成されていないのではないかという問題意識をもっています。そこで、自身の授業で効果的に問題発見力を育む方法を実践的に研究したいと考えています。この2年間で講義から得た理論を基に、省察力など教員に必要な力を身につけ、理論と実践の往還を通して自身の問いに向き合っていきます。

佐藤 琉生（教科領域実践コース）



学部時代、このまま教壇に立つのは不安だという思いが大きくなり、教職大学院への進学を強く考えるようになりました。入学し、最初のガイダンスのことです。ミドルの方々の引き込まれるような自己紹介を聞いたとき、この大学院に入学してよかったなと感じました。先生方や現職のミドルの方々、ストマスのみんなの吸収できる部分はすべて吸収し、実りのある充実した2年間にしたいです。そして卒業の時、ここだけは誰にも負けないという強みを持った教師になれるよう頑張っていきたいです。

武田 泰旺（教科領域実践コース）



このたび入学するにあたり、新たな環境で学べることに大きな期待と責任を感じています。これまでの学びを基盤としながら、理論と実践を往還し、自ら課題を見いだして深く探究してい

きたいと考えています。特に、生徒一人ひとりの理解度や背景に応じた指導方法や学習意欲を高める関わりについて実践研究を進めたいです。また、他者と協働し、多様な視点を取り入れながら学びを深めていきたいと考えています。さらに、現場での実践を通して課題を具体的に捉えて改善につなげていきたいです。将来は、生徒の思考を尊重し、ともに成長し続ける教師を目指します。

田中 美羽（教科領域実践コース）



院生室の仲間たちと過ごす毎日は、私にとって今までになく刺激的なものとなっています。私は弘前大学理工学部で物理学を学んでおりましたが、学部在籍中に教育実習を行った際に、教材研究をまったくの手探りで進めるこ

とに困難を感じました。知識を足掛かりにししながら教科指導を計画する力を養いたいという思いから、教職大学院への進学を決めました。4月が始まって間もなくミドルリーダーの先生方との議論を交えながら生きた教育理論を学んでいく日々が始まり、どんな活動からも想像以上に多くの発見があります。仲間と助け合って学びを深められるこの環境を成長のために最大限活かし、子どもたちの科学を見る眼を育てられる教員を目指したいです。

松村 一平（教科領域実践コース）



入学にあたり、新たな学びの場に立てることに大きな喜びを感じています。同時に、自分が教師としてどのように成長していくべきかを真剣に考えています。これからは、探究的な学びを軸に、生徒が主体的に考え、学び続ける

力を育てる授業づくりについて研究していきたいです。また、生徒一人ひとりの実態や多様な背景を踏まえた指導の在り方についても深く学びたいと考えています。現場での実践と理論を往還しながら、自ら問い続ける姿勢を大切に、生徒に寄り添える教師を目指します。

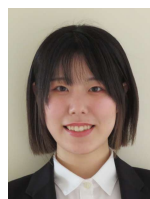
マレロ 剣士朗（教科領域実践コース）



私は農学生命科学部での研究室経験を通して、議論の重要性を学びました。特に理科は観察対象を扱いやすく、検証可能な形で根拠に基づいた仮説を立てやすい点に魅力があると考えています。議論では正解を模索する

過程の中で、相手を納得させるための根拠を用意し、自身の発言に説得力と責任を持たせる経験が繰り返されます。また、意見の相違は否定ではなく、より妥当な説明に近づくための過程であり、その人にしか生み出せない価値ある視点でもあると捉えています。こうした経験は「考えた主体としての自分」を支え、アイデンティティの確立にもつながると考えます。今後は教職大学院での学びや実習、他の院生や先生方との交流を通して、このような議論を生かした授業づくりを実践的に探究していきたいです。

山田 彩乃（教科領域実践コース）



大学院生活にも慣れてきた中で、日々の学びの深まりを感じています。教職大学院では、多様な実習や講義など充実したカリキュラムが整っているだけでなく、現職の先生方と共に学び、議論する機会が多いことに大きな魅力と

意義を感じます。さまざまな考えに触れることで、自身の視野の広がりを実感できます。この2年間で、興味を持ったことには積極的に挑戦し、教員としての自覚と指導力を着実に身につけていきたいです。

豊島 美咲（特別支援教育実践コース）



桜が芽吹き始め、春の訪れを感じる季節となりました。

教職大学院での生活が始まり早2週間。他大学・他学部からの進学ゆえ、当初は不安もありましたが、個性豊かなストレー

トマスターの皆さんや経験豊富なミドルリーダーの方々に囲まれ、刺激的な毎日を過ごしています。学部時代は座学を中心に学んでいましたが、この2年間では実習に留まらず、ボランティア等を通じて積極的に教育現場へ足を運びたいと考えています。現場での経験を積み、「理論と実践の往還」を体現するとともに、研究テーマである「自己肯定感」について深く追究する所存です。

至らぬ点も多いかと思いますが、21人の仲間と共に切磋琢磨し、実りある2年間にしたいと思います。

「教育実践研究発表会」(年次報告会・最終報告会)実施 — 県内外からの多数の御参加に感謝 —



令和8年2月16日(月)、青森県総合学校教育センターをお借りし、「対面」と「オンライン」併用による「教育実践研究発表会」を実施いたしました。県外からのオンライン参加者も含めると、総勢100名以上での開催となりました。

1年次院生にとっては今回が初めての発表会でした。1年次院生は、この発表会に至るまで、研究の意義、リサーチクエスションの立て方、研究倫理、エスノグラフィーとその技法等、研究の進め方を段階的に学んできました。そして、夏から秋にかけて研究テーマを絞り込み、授業実践や勤務校実習を通して仮説を検証、成果や改善点を明らかにした上で臨みました。

2年次院生は、1年次の成果や課題から仮説の修正等を行い、実践研究を進めました。定期的に行う個別ゼミや全体ゼミにて様々な視点から意見もらい、11月には「中間報告会」を行いました。そこで明らかになった課題を基にさらに実践研究を進め、2年間の集大成である「最終報告書」としてまとめました。2年次院生が今回発表したのは報告書にまとめられた内容になります。



また、当大学院には、学部卒院生と現職教員院生が在籍していますが、研究テーマについては、学部卒院生が個人の実践研究を主としているのに対して、現職教員院生は同僚との協働的な取組を視野に入れた実践研究が多くなっています。これは、現職教員院生の属するコースがミドルリーダーの養成を企図しているためでもあります。ここでの研究が実際の教育活動により効果的に寄与することを願っております。

最後に、今回の教育実践研究発表会に際し、御挨拶いただきました県教育委員会教育次長 坂上香苗様、現場の目線で御助言・御講評くださいました弘前市立文京小学校校長 佐藤一晃様、青森市立佃中学校校長 黒丸健吾様、弘前実業高等学校校長 中川伸吾様、青森第二高等養護学校校長 佐藤忠全様、院生に多くに気付きと励ましをくださった県教育委員会の皆様に心から感謝を申し上げます。

2026 中間報告会・教育実践研究 発表会

- ① 中間報告会
11月14日(土)
会場：弘前大学教育学部
- ② 教育実践研究発表会
2月6日(土)
会場：弘前大学創立50周年記念会館
※いずれも対面・オンライン併用。



＜編集・発行＞

弘前大学 大学院教育学研究科
教職実践専攻 (教職大学院)
〒036-8560
青森県弘前市文京町1番地
Tel : 0172-36-2111(代表)
メールアドレス: k-daigaku01@hirosaki-u.ac.jp